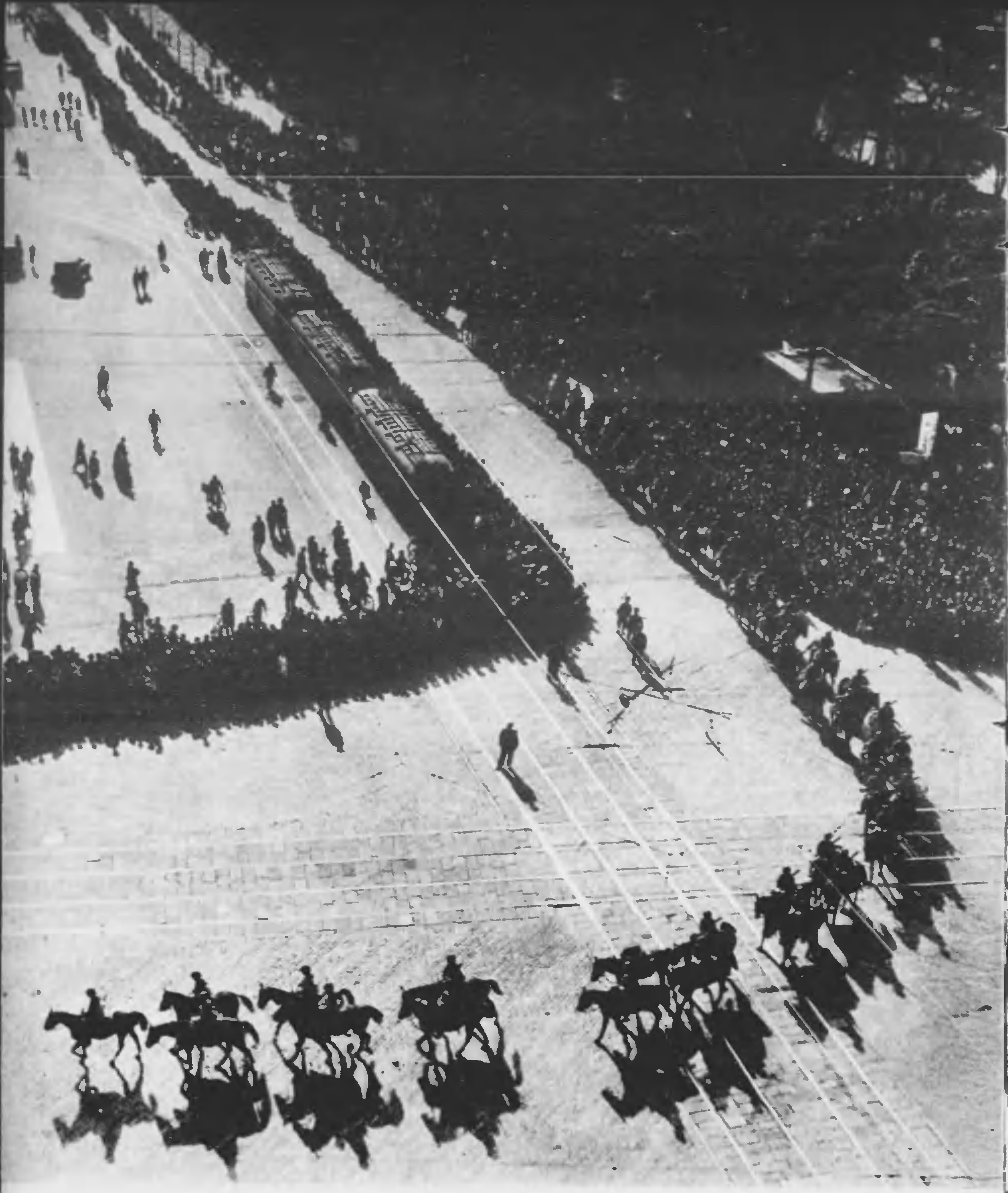
寫眞週報

内閣情報部編輯
二月廿二日・第五十三號・十セン
昭和十三年二月十二日第三種郵便物認可　昭和十四年二月廿二日發行（毎週一回水曜日發行）第五十三號

三河の新天地

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/



紀元二千五百九十九年の佳節、二月十一日は碧空清朗の興亞建國日和であつた。

この日都大路に繰り展げられた鐵蹄堂々の愛馬大行進は時局下の佳節を奉祝するにふさはしい壯擧であつた。

愛馬進軍歌

一

くにを出てから　幾月ぞ
共に死ぬ氣で　この馬と
攻めて進んだ　山や河
執つた手綱に　血が通ふ

二

昨日陷した　トーチカで
今日は假寢の　たかいびき
馬よぐつすり　眠れたか
明日の戰は　手強いぞ

三

彈丸の雨降る　濁流を
お前たよりに　乘り切つて
つとめはたした　あの時は
泣いて秣を　食はしたぞ

四

慰問袋の　お守りを
掛けて戰ふ　この栗毛
ちりにまみれた　髭面に
なんで懷くか　顔よせて

五

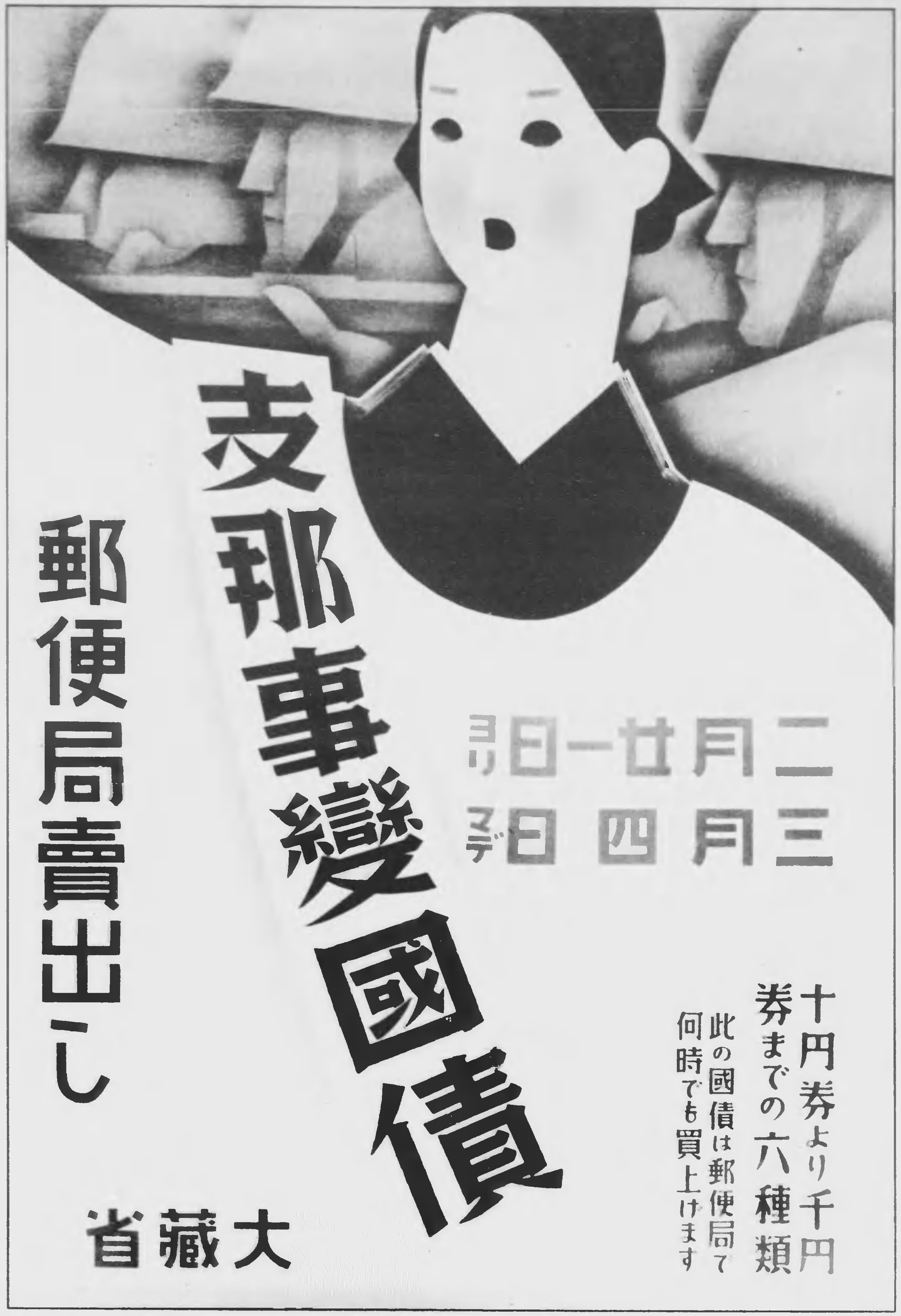
伊達には佩かぬ　この劍
まつさき驅けて　突込めば
何ともろいぞ　敵の陣
馬よ嘶け　勝鬨だ

六

お前の背に　日の丸を
立てゝ入城　この凱歌
兵に劣らぬ　天晴れの
勲は永く　忘れぬぞ

—陸軍省撰定—

撮影　梅本忠男


支那事變國債
郵便局賣出し
二月廿一日ヨリ
三月四日マデ
十円券より千円券までの六種類
此の國債は郵便局で何時でも買上げます
大藏省

三河の新天地

サンハウ

白系露人の集團部落

滿洲國が誕生して早くも七周年、王道の慈光愈々邊土にも洽ねきいま、北滿の一角三河地方に赤露の桎梏を逃れて安居樂業する白系露人の集團部落がある。

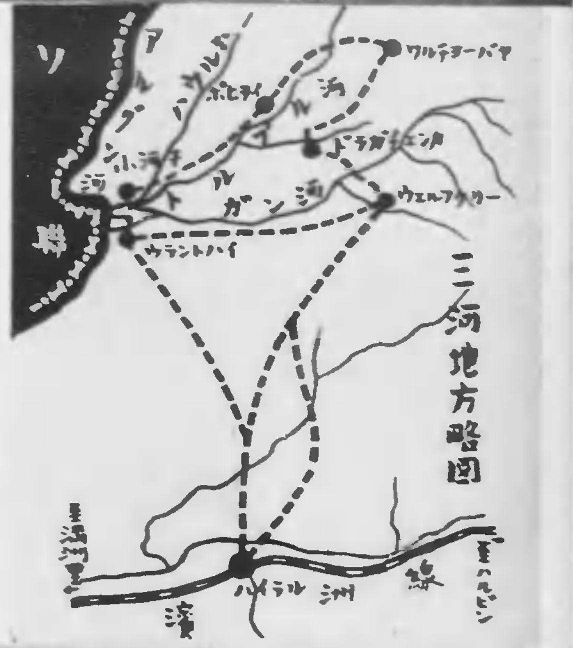
哈爾濱、滿洲里間の鐵道、濱洲線の海拉爾から北へ百五十キロ、西はアルグン河を挾んでソ聯と接し、東は興安嶺支脈の密林につゞく一帶の秘境ハウル、トルブル、ガンの三河が豊饒な沃野を潤ほすところ、そこが三河地方である。

三つの河に沿つて風を避け、日光に惠まれるゆるやかな南面のスロープに點々と部落をつくる彼等、彼等こそはかつて帝政ロシア時代ザバイカル地方に據つて茫漠のシベリア平原を鐵蹄の音も勇ましく縱橫無盡の活躍をつゞけた精悍比ひなきコザック兵であつた。十月革命起るや赤色政府の統治下に生きることを潔しとせず、墳墓の地ザバイカルを去つてこの地に移住した彼等六十萬のザバイカル・コザックは、農耕地を開墾し、牧畜にいそしみ、ひたすら第二の故郷建設に努力した。

しかし、國境を接して反ソ的コザック農民の居住することはソ聯に取つては目の上の瘤である。一九二九年には有力な赤色パルチザン隊が組織され國境を越えてこの地方を襲撃し、虐殺、掠奪と暴虐の限りを盡して過去幾年彼等が血と汗の結晶を一夜にして奪ひ去つてしまつた。また一九三二年の秋には更に蘇炳文一味の反亂が起り、住民は再び反軍の賦くなき誅求にあつて塗炭の苦しみを嘗めねばならなかつた。

滿洲國の誕生は悲運に喘ぐ彼等コザック農民に取つて天來の光明であつた。五色旗一たび甦へつて天惠の沃野に生活の愉悅は再び彼等の手に歸つた。樂土三河は滿洲國政府のあたゝかい保護と彼等のうまざる努力によつて見事再建された。いま豊かな穀倉から聞える長閑なコザックの歌、家畜肥える牧場に見える樂しいコザックの踊り、彼等の喜びにあふれる姿こそ樂土滿洲國の象徴である

⇧ 清流をうけて水車がゴト〱とのどかに廻つてゐる。豐かにとれた小麥はこゝで製粉される。



撮影　南滿洲鐵道株式會社

小麥粉の共同出荷のために三河製粉公司が出來てゐる。こゝでは部落民に雜貨も賣つてゐる。⇩

⇨ 牧畜は農業と竝んでコザック農民の傳來の天職だ。豚の世話牛の乳搾りは娘たちの毎日の仕事だ。

⇦ 勤儉力行の彼等には早くもトラクターを買ひ入れての大農經營も見られるやうになつた。一望千里の沃野は耕やして種を播けば豐かに實るのだ。

⇦ おぢいさんから孫まで、一家揃つて働いて、頬ばる午飯のうまさ、家から乘つてきた馬も草を食つてゐる。暖かい陽の中にたゞ平和だけを感じて。

三河の新天地

⇧ 男たちが野に出て働く時、老婆や子供は靜かに家を守る。鷄に餌をやる子供たちに丘の上から教會の鐘がきこえてくる。

⇩ 日曜日、教會では禮拜式がはじまる。丸木造りの教會に大人も子供も聖歌を歌ひ、靜かな祈りを捧げに遠くから集まる。

⇦ 三河はいま彼等の墳墓の地となつた。かつて暴虐の犠牲になつた祖先に心からの祈りを捧げ、新らしい生活の建設に固い決心をする

⇨ 嬰兒は搖り籠に、幼兒は母のまはりに、嬰兒は安らかに、幼兒は豐かに育てられてゆく素朴な台所に春の陽が燦々と流れ込む。

⇦ コザックから馬ははなすことが出來ない。昔忘れぬ騎馬鬪魂は精悍なコザック騎兵時代を偲ばせる。

⇦ 春に秋に祭の日のコザック踊りは何といつても樂しいものゝ限りだ。手風琴のリズムに合はせて、生活の喜びが野の果まであふれ流れる。

アジア歴史資料セン
Japan Center for Asian Historical
http://www.jacar.go.jp/

假繃帶も彈の中

野戰病院

肩の上で『煙草がのみたい』と訴へる傷兵を衞生兵は靜かに草の上に降ろして煙草に火をつけてやる。乾いた唇がぷーつと吐く煙を衞生兵は重い氣持でぢつと見つめる。

學校の校舍を利用して野戰病院が開かれた。ついさつきまで敵が立て籠つてゐた校舍を清掃してベツドを竝べ、衞生材料を整備し、戸外にはテントを張つて傷兵一時收容所を造る。赤十字旗も日章旗とゝもに高々と押し立てられた。

假繃帶所から傷兵が運ばれてくる。衞生兵はぢつと苦痛を堪へる兵を何かといたはりながらテントの一時收容所に運び込む。軍醫が取りあへず傷の程度を診斷して更に病室に收容する。

『明拂曉五時を期し、〇〇總攻擊』の命令が第一線部隊に下つた。第一線各戰鬪部隊の緊張は勿論のことだが、この部隊所屬の衞生兵も亦忙しく脱脂綿、繃帶、ガーゼ、三角巾、消毒藥等をとゝのへる。第一線部隊への攻擊命令と同時に後方基地にある兵站部隊には『占領とゝもに〇〇に前進すべし』の命令が下る。部隊の一部は豐富な糧秣、彈藥を補給するとゝもに、衞生隊は占領地に出來うるだけ早く野戰病院を設けねばならない。

愈々激戰が展開される。と、敵の猛射の中を匍ふやうにして攻めてゆく味方の間を縫ひ、身を挺して活躍してゐる兵がある。衞生兵なのだ。傷いた戰友を彈雨下に手當し、いち早く後方に運んでゆく。

第一戰部隊が〇〇を占領すると、殘敵掃蕩が濟むか濟まないうちに早くも衞生隊は凡ゆる危險を冒して乘り込み、適當な家屋を利用して大急ぎで野戰病院を開く。假繃帶所からは續々と傷兵が運び込まれる。衞生兵は朝から晩まで、晩から朝まで飯を食つてゐる暇も、寢る暇もない。

敵は、退却の際に井戸やクリークに病源菌を投げ込んでゆくことがある。それと知らずにこの水をのめば部隊も難民も猛烈なコレラやチブスに冒され猖獗を極める。こんな場合衞生隊は更に決死の覺悟で恐るべき病源菌とも鬪はねばならない。

やがて第一線部隊は前進、××への攻擊を開始する頃、〇〇の野戰病院は僅かな警備兵にしか護られてゐない。敗殘兵はそこを狙つて襲つてくる。赤十字旗がはつきり見えてゐても、敵には人道も國際法もない。警備兵だけで足りなくなると衞生兵も敢然と銃を執る。衞生兵から軍醫まで總動員、銃身の燒けるまで擊ちつゞけ、三晝夜の後やうやく敵を擊退したといふ例もある。

赤十字の徽章を自分の血で染めつゝなほ戰友の、時には敵兵の看護にさへ身を献げて顧みない衞生兵の姿は醜い戰場に限りなく尊い。

あそこで戰友がやられたな、と見ると衞生兵は自分の身の危險などは丸で忘れて彈雨の中をとんでゆく。戰友は倒れても銃を放さない。戰友を抱き起した衞生兵は敵彈が頬をかすめても繃帶する手を休めない。

應急手當をすますと、いち早く傷兵を擔架に載せてやゝ後方の假繃帶所に運ぶ。出血を防ぐために擔架を水平に而も動搖させまいと、衞生兵は彈丸の來る中を人知れず苦心する。

撮影　内閣情報部

野戰病院

⇨野戰病院の衞生施設は開設後日を經るに從つて次第にとゝのひ、內地の病院と變らぬ完璧を期するやうになる。藥室には各種の藥品が豐富に並び醫療器具が整備される。

⇧飯の時間、輕傷の兵はベツドに起き並んでゐる。衞生兵はその一人一人に飯を配つて廻る。起き上れない兵にはベツドの側に寄つて一口一口喰べさせてやる。

⇨『どうだね、具合は？』運び込まれた時はひどい出血のために危かつた兵も、懸命の看護で大部血色もよくなつた。看護疲れの衞生兵の顏にほつと安堵の色が浮ぶ。

病室に清潔に！　衞生兵は病室の掃除もする。貧弱ながら植木鉢も何處からか工面してくる。傷兵たちの苦痛を何とかして和げようと、武骨な體を休む暇なく働かしつゞける。⇩

⇦活字が見たい。戰線の勇士たちは一人殘らず文字に飢えてゐる。殊にベツドに橫はる傷兵はものを讀みたがる。衞生兵はその氣持を察して八方探し廻つて古雜誌を手に入れ、暇をみてはかうして讀ましてやる。

アジア歷史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

戰場に散った花

支那事變が起るとともに聖戰の陰に身を捧げ皇軍將士へ心からの慰めと温かい看護を盡し、遂に征野に殉じた白衣の天使――日本赤十字社派遣救護看護婦――の雄々として戰ひの庭に殘した活躍の跡は戰線の兵士の行動とともに、國民の齊しく感謝の念を捧げてゐるものである。

この戰場に散つた救護看護婦の數々の美談はこのほど全國の支部から東京の日本赤十字本社に報告され近く同社から上梓されることになつてゐる。

柳澤もゝよ

長野縣諏訪郡泉野村の農村にも「祝出征」の長旗が立てられ事變勃發の緊張が實直な農夫の額にまざまざと刻まれてゐた。村の若者は鍬を銃に代へて戰線へ〱と勇んで向つた。鎭守の森には晝夜中まで皇軍の武運長久の祈願が續けられ、全村は、暴支膺懲の意氣に燃えてゐた。かうした村の感激が日一日と昂まれば昂まる程同村の鎚重さん二女日本赤十字社救護看護婦柳澤もゝよさんの胸のうちは或淋しさで一杯であつた。戰線は愈々擴大され昭和十二年八月九日には大山海軍大尉事件が起り憤激のわが海軍陸戰隊によつて上海攻撃の火蓋は切られた。疾風果敢な皇軍は早くも同月卅一日呉淞鎭を占領した。この戰勝の報に村が歡喜に醉つてゐたときも柳澤さんは一人村はづれにある亡兄の墓前に默々と額づいてゐた。

同九月廿九日柳澤もゝよさんの許へ始めて召集令が下つた。召集令状を握るや否や彼女の淋しそうな顔は見る〱紅潮し、昨日まで默々と額づいてゐた亡兄の墓前にかけつけ感激の涙で「兄さん唯今もゝよは戰地へ參ります」と報告、日本赤十字社長野縣支部〇〇救護班員として雄々しく北支に向つた。十月十四日柳澤さんは進藤部隊に屬し天津の地を踏んでゐた。天津兵站病院も傷病兵で一杯であつた。責任感の強い彼女は「受持兵は慈愛と獻身の看護で必ず治す」といふ堅い決心を持ち不眠不休の看護を續けてゐた。

年改まるとゝもに部隊は德縣に前進、もゝよさんの白衣姿も同地兵站病院に見られたが、翌月二月には濟南兵站病院に移つてゐたといふやうに目まぐるしい轉戰ぶりであつた。三月も忙しい看護に終り、翌四月皇軍は徐州へ〱と進撃を開始、同月三日皇軍の徐州包圍態勢は成つたのである。この頃から味方の負傷も多くなり徐州の兵站病院の柳澤さんの活躍は加速度的な激務が續けられ、足はむくみ眼はくぼんだけれども聖戰に立つ尊い任務の遂行には自分の體など省みる暇はなかつた。

もゝよさんの苦勞も報いられる日は來た。徐州戰線に參加して一ヶ月半、五月十五日には徐州完全攻略はなつたのである。激戰を物語る負傷兵の數は多かつた。

その頃力のない咳が彼女の口からはかれ、過勞から身體は極度に衰へてゐた。「もゝよさん、どつか惡いんぢやない、顔色がとても惡いわ」といたはる同僚にも「お國に捧げた體ですもの少し位の熱がある位で……」と氣丈に病氣をかくさうとした彼女の努力もある夜ひどく咳込んだ末思はず制服の袖を眞紅に染めた喀血の前には施す術はなかつた。「もゝよさんしつかりして」と同僚に抱きかゝへられベッドに臥した彼女の顔は憔悴前の淋しい表情に變つてゐた。過勞と氣候の變化から柳澤さんは遂に肺をおかされてゐた。病勢は次第に重くなり内地送還が決せられた。

この悲しい命令に、もゝよさんは苦しい息の下から泣いて戰地に骨を埋める秘めた決心をしんみりと戰友に語つた。

私には兄がありました。妹思ひのいい兄でした身は軍籍にあり立派な帝國の在郷軍人でした。妹の私から申すのもお恥しいことですが人一倍軍國意識に燃へてゐた兄はよくいひました。「兄妹で戰線に立てる日があつたら、こんな名譽のことはないぞ」といまも私にさゝやいてをるやうです。その兄がかりそめの病で床に臥し臨終の際に「柳澤家で國家のお役に立つ身は、もゝよ一人だ。戰線に立つたときは見苦しい行ひはしてくれるな」といつたまゝ不歸の人となりました。その兄の一周忌もたゝないうちに支那事變が起り、村の若者が勇躍出征する姿を眺めては「兄がゐてくれたら」と淋しさに沈みました。ですが私は地下に眠る兄の靈に誓ひました、「私は兄の靈を背負ひ二人分戰地で働きます。どうぞ兄さんの庇護で早く召集されますやうに……」と

何度もよどみながら語るもゝよさんの息づかいは荒れて、消え入るやうな目には大粒の涙さへ光つて、「お願ひです。兄に誓つた言葉もあり、何等働きらしい働きをしてゐない私を……そのうちにはきつとよくなります、送還だけは見合せて下さい」と切々訴へるもゝよさんの健氣な言葉に上司は感涙に咽んでゐた。しかし病は刻一刻急迫を告げ、遂に八月廿八日内地へ送還された。小倉陸軍病院で手厚い看護を受けたが、九月一日、二十三歳を一期に兄の後を追つていつたのである。

もゝよさんが如何に傷病兵を勞はり、遂に殉職の身になつたかは戰地から郷里の友人に宛てた通信にもよくあらはれてゐる。

毎日多數の患者の治療に、手術に、回診に流石は戰地だと思はれます。戰線から送られて來る患者さんを見ますと本當に兵隊さん方の御苦勞がつく〲と感ぜられまして充分看護して上げなくてはならぬと思はれます。自分達の體のことなど考へてはゐられません。當番の夜は歩けぬ足の不自由な患者さんを次から次と御世話する時はじめて自分達の勤めの如何に重大であるかゞ感ぜられます。知る人もなく苦しい病床に臥す將兵の方々には唯私達が心から盡して上げるより方法が御座いません。及ばずながら母とも姉ともなつて看護申上げてゐます。

小林起く

三重縣日本赤十字社支部〇〇救護班員小林起くさんは一昨年九月十九日〇〇港を出港した病院船の上甲板で岸が見えなくなるまでハンケチを振り聖戰の途に身を置く感激に浸つてゐた。

九月廿三日上海に着いた病院船は忽ち傷病兵三百名を收容し、目のあたり激戰の姿を傷病兵に見たのであつた。小林さんの活躍はその日から始まつた。「痛い」「足がないやうだが、見て下さい」八方から襲ひかゝる怒號が飛ぶ中を、甲斐々々しく立ち働いた。

丁度その頃海は荒れ、激しい颱風季節であつた。船を呑むやうな激浪に船體の動搖は甚だしかつた。船になれない小林さんは灼けつく殘暑と、船暈に惱まされながら日夜精勵傷病兵の看護に當つてゐた。收容者は殆ど重傷者で懸命に手當を盡してゐたが、患者中から數名のコレラ保菌者が現はれたことには救護班員一同は驚愕した。遂に船は内地の山を見た

から〇〇港外に三日間の假泊碇繋を命ぜられた。この間小林さんの厳密な防疫作業は續けられた。責任感の強い彼女はまるで自分の不注意からでもコレラ患者を出したもののやうに、寢食を忘れて防疫に從事し、遂に過勞から十月二十日腰部に疼痛を訴へ始めた。診斷の結果急性腰部レウマチスと判り、同二十二日召集解除となり三重縣安濃郡草生村の自宅に歸着療養中急に病勢惡化十二月九日遂に三十五歳を以て職に殉じた。

小林さんの責任感の強いことは同縣支部に次のやうな話が殘されてゐる。

昭和四年小林さんが大阪市北區常安町淑德看護婦會に勤務中、兵庫縣下に腸チフスが發生したが、彼女は、この看護を進んで引受け、遂に自らも感染罹病生活をしてから一層の責任感が培はれたものである

小林さんは藤次郎さんの三女として生れ、大正八年今村女子技藝科修了、大正十三年日本赤十字社救護看護婦に任命されたものである。

新田ハル

日本赤十字社島根縣支部救護看護婦新田ハルさんも一昨年八月十七日同支部〇〇班に應召、病院船〇〇に乘組み從軍の第一歩を踏み出した。

八月二十日には早くも山野部隊に編入、上海からの第一回の傷病兵送還に從事、船暈を押して傷兵を勞はつてゐた。第一回の上海航行以來新田さんは東支那海の颱風と鬪ひながら昭和十三年七月二十日の第十二回目の〇〇からの歸路航行中でのこと、東支那海の夏はもの凄く暑く、海は荒れに荒れて病院船は木の葉のやうに飜弄された。この夜、船の動搖を懸命にこらへながら傷病兵のベッドを一回りし疲れた體をボート・デッキに歩をはこんでゐた。新田さんは船を呑むかと思はれる怒濤の強襲にアットいふ間に足をさらはれサロン・デッキに十五六尺墜落してゐた。仰向けに墜落したゝめ背部をいやといふ程打ちつけ疼痛は激しかつた。

新田さんはこの夜の出來事はひたかくしにかくし何氣ない風で患者の看護に當つてゐた。しかし背部の痛みは日を追うて劇しくなつて來た。戰線はますます擴大激戰は續き負傷兵の數も增加して來た。彼女は自分の打撲傷を治療する餘裕など到底なかつたかうして痛みを押した航行は廿二回に達した。廿二回目の航行を終へた七月廿一日遂に新田さんは疲勞と背部の劇痛のためドッと倒れてしまつた。

病むベッドで語る十二回目航行の事故を聞かされた同僚は痛みを押して職務に盡した新田さんの責任感に感謝を捧げるとゝもに内地歸還後に彼女が病む松江陸軍病院の一室を見舞つた。その後新田さんの容態は急變皇軍瑞昌占領の戰勝を聽きながら八月廿五日二十四才を一期として背部强打胸膜炎で逝去した。

新田ハルさんは島根縣八束郡熊野村に生れ昭和六年郷里の青年補習學校研究科を卒業、同十一年三月日本赤十字社救護看護婦に任命されてゐた。

竹内喜代子

聖戰に立つ皇軍將士を送る歡呼の聲が日夜の別なく全國津々浦々で叫ばれてゐた一昨年九月廿四日、島根縣那賀郡濱田村大字原井五二二日本赤十字社島根縣支部救護看護婦竹内喜代子さんの許にも名譽の召集令が下つた。

年來の使命を果たすその日は遂に來たのである。支部員の熱誠なる萬歳に送られて、島根〇〇救護班員「竹内喜代子」は早くも翌月、十月四日には未だ敵の包圍下にある上海に上陸、或は轟々たる空爆の下に、或は炸裂する砲彈の裡に假寢の暇もなく今野部隊に屬し、次々に後送されて來る傷病兵を甲斐々々しく看護し續けてゐた。

死線を超へた勇士が双眸を潤ませ感謝の目ざしで「母」と呼び「姉」と慕ふ姿に接する度毎に、喜代子さんの全身は感激で打ちふるへ胸一杯の慈愛の看護にわが身を忘れてゐた。

上陸二旬後上海も皇軍の占領するところとなり部隊は限りなく前進を開始した。喜代子さんの足跡も部隊と共に南京へ、徐州へ、安慶へ激戰に參加、各兵站病院では慈母の如く將兵に敬愛され、なくてはならぬ人となつてゐた。

南京の[illegible]であつた。暑熱とゝもにこの地方一帶にも惡疫コレラが發生し始めた。皇軍のコレラ患者發生は日を追うて多くなつていつた。このとき今野部隊から山本部隊に轉じた竹内喜代子さんは從軍早くも一年再び南京の土を踏んでゐた。

コレラの蔓延は日に日に劇しく、[illegible]以上に皇軍を惱ませた。衛生隊は必死の防疫陣を布いた。間もなく南京兵站病院にはコレラ病室が增設された。喜代子さんは進んで同病室看護を志願、肉身も及ばぬ彼女の看護姿はベッドからベッドへと小鳩のやうに飛び廻り身を以て將兵を護つてゐた。眠られぬ夜は幾日も續いた。患者の苦しさうな聲は喜代子さんの耳朶から決して離れなかつた。かうして汚物の處理、[illegible]の製作に、注射に、碎氷に追はれて八月十五日未明ベッドをひと廻りして來た喜代子さんはいつになく身體が熱つぽくだるいのに氣がついた。「大したことはないの、きつと疲れたのでせう」とけなげにも床についたが病魔の床とならうとは。喜代子さんは何時の間にか患者のコレラに感染してゐたのである。しかも最も惡性の[illegible]コレラに感染してゐたのである。「[illegible]」と苦しさうな呼吸の下から「私よりも第〇〇號の患者さんに手當をして下さい」と言つてきかなかつた。しかし下痢嘔吐は[illegible]劇しく、[illegible]看護した傷病兵達の愛を一身に集めてゐた彼女の病を耳にした山本部隊長は早速[illegible]、上原班長を指揮して看護に當つた。しかしその甲斐もなく同月十五日午前九時病勢は刻々に惡くなつていつた。苦悶に喘ぎながらも受持ちの患者の身を思ひ「アア患者さんも[illegible]苦しいでせうか」と語り、既に死を覺悟したものゝやうに後事を親友に托し同日午前九時[illegible]南京兵站病院の一室で多くの同僚に看とられ[illegible]二十六才を一期として聖戰に殉じたのである。同日午後三時悲しみを南京に殘し遺骸は山本部隊長をはじめ[illegible]兵站病院の廣場で八幡看護婦長の手で點火され荼毘に附された。

このメラ〱と燃える悲しい炎の火に向つて[illegible]「[illegible]」と白衣の勇士が人目も憚らず泣いた。この勇士こそ故人と喜代子さんの必死の看護によつてコレラを征服した命の恩人に對する感謝の涙であつたと報告されてゐる。

この戰野に咲いた純潔な佳話を聞いた荻洲部隊長は少將は同看護婦の行爲を稱揚し

「……これ將兵の戰野に於て戰彈に斃るゝと何等選ぶ所なし。而も臨終に際して雄々しき覺悟とその態度に至りては[illegible]存せり。此の事や同人不斷の修養と赤十字社精神の[illegible]によるもの[illegible]益しその功績大にして以て他の模範とするに足るものなり」

と表彰狀を與へ生前の功を讃した程であつた。

戰野に殉じた故人として派遣軍將兵からも激賞された竹内喜代子さんは床しい心の持主で看護に燃ゆる如き愛を捧げたと同時に從軍の餘暇を和歌によつてなぐさめてゐたことが遺稿によつて明らかにされ、故人を偲ぶかたみとされてゐる。

城壁にそふて掘られたクリークに
水もぬるみて春かへるいま
中山路國民政府の門上に
見よひるがへる我日章旗
はらからの燃ゆる血潮は火となりて
[illegible]紫金山

竹内喜代子さんは濱田町の[illegible]の[illegible]で、昭和五年島根縣立濱田高等女學校を卒業、同八年四月日本赤十字社救護看護婦に任命されたものである。

國策料理

鯨　鯛　兎

指導　筒井政行
撮影　梅本忠男

國策料理を食べませう。廉價で榮養價に富み、しかも簡單に出來て美味しいことが國策料理の生命です。

わが國でその漁獲高も多い鯛、鯨、今事變以來軍需防寒具に毛皮を捧げ養殖も盛んになつた兎等の肉はまさにこの條件にかなつてゐます。

しかし兎、鯛、鯨は何れも臭くて食へぬといふ方があります。この臭味は兎の場合は臭い生殖腺を除けばよく、鯨、鯛は調理法によつて臭みも拔け一寸乙なものとなります。

榮養價から見た蛋白含有量は兎の二十四パーセント、鯨の二十二パーセントで牛のロースの含む十六パーセントにはるかに優り、鯛は十六パーセントで同格ですが、ビタミンDを多量に含んでゐます。

東京市は二月八日一般家庭の料理も、時局柄國策的でなければならぬと國策料理講習會を開きました。料理の材料は兎、鯨、鯛が用ひられ、講習生の方々も臺所がもつ國民保健の鍵を握らうと熱心に講習をうけました。

1　鯨ステーキ

材料――五人前として鯨肉四〇〇瓦、ルリー一〇枚、玉葱五〇瓦、大豆油食匙八杯、醤油二五瓦、醤油、味淋各食匙五杯、味の素、粒胡椒少々（材料費六十錢位）

準備――大豆油の中に玉葱のせん切と、くだいた粒胡椒、月桂樹の葉を入れる。この中へ五分位の厚さの大切の肉を三十分位漬けておきます。

作り方――フライパンを火にかけて牛の生脂を溶き肉を入れて中火で兩面を焼き、味淋醤油をさして、とつてりとした味に焼上げます。付合せに野菜のホワイト・ソース煮をつけます。

2　鯨のカレーライス

材料――五人前として鯨肉、大根、玉葱各三〇〇瓦、人參一五〇瓦、馬鈴薯二五〇瓦、炒め油食匙四杯、油食匙五杯、メリケン粉食匙六杯、カレー粉食匙一杯、煮出汁五合、鹽少々（材料費四十九錢位）

準備――野菜は四、五分角の賽の目に切り、鯨肉は五、六分の薄いそぎ身に切ります。

作り方――鍋に油を熱し大根、人參、馬鈴薯を入れて炒め、煮出汁をさして煮ます、別に鯨と玉葱を炒め、野菜が軟く煮えたところへ加へ鹽、胡椒で味をつけます。フライパンに油を熱し、火からおろしてメリケン粉を狐色に炒め次にカレー粉を入れてまぜ合せ煮汁を少しづゝ入れてのばしてから鍋にもどして煮込みます。

1

2

3

4

3　兎の山吹團子

材料――五人前として兎挽肉四〇〇瓦、豚生脂四〇瓦、玉葱一〇〇瓦、パン粉食匙八杯、砂糖食匙三杯、鹽食匙一杯、卵一ケ、新卵二ケ（材料費六十五錢位）

準備――兎の挽肉の中へ豚の生脂を挽いてまぜ合せておきます。玉葱はみじん切にし、卵二個をかた茹にし、黄味と白味に分け、黄味は裏ごしを通し白味は細かく刻んでおきます。

作り方――まぜ合せた肉の中へといた卵、パン粉、砂糖、鹽、玉葱、刻んだ白味を入れてまぜ合せ小さな卵位のお團子に丸め、蒸し器に布巾を敷いた上にならべて十五分位蒸します。蒸し上りましたら一寸さまして裏ごしを通した黄味をきれいにふりかけます。

4　鯛の粕汁

材料――五人前として鯛五尾、人參、牛蒡各一〇〇瓦、大根二〇〇瓦、葱一二〇瓦、酒粕白みそ各一五〇瓦、煮出汁四合（材料費二十二錢位）

準備――鯛は丸ごとブツ切にして鹽をふりかけて三十分位おき、人參、牛蒡、大根は皮付のまゝ一寸位のまわし切となし葉は[illegible]状小口から細く刻みます。葱は五分位のぶつ切、酒粕はひたひたの湯を加へてしばらくおきます。

作り方――人參、牛蒡、大根を鍋にとり、かぶる位の水を注ぎ軟くなるまで煮る、酒粕と白味噌を一緒にすり、野菜の煮へた中へ注ぎ入れます。鯛は鹽を洗ひ落し、煮立つた汁の中へ入れて煮込み、葱のぶつ切、刻み大根葉を入れて一と煮立ちしたら火を止めます。

割烹衣も甲斐／＼しく「鯛は厚目のそぎ切――」と講義ノートを暗誦しながら作る國策料理の階梯は進み出來上る味が待ちこがれてゐる。⇦

『肉は薄くそぎます』と講師の説明に講習生は一齊に庖丁を握り一生懸命そいでゐます。『兎肉は柔くて料理は簡單ね』といひたげな手捌きです。⇦

國民體位の向上は家庭の臺所からも協力出來ます。集まつた家庭の主婦連はやすく美味しい國策料理の出來上るまでを傾聽してゐます。⇨

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

アルプスの雪中演習

ドイツ陸軍

燃えあがるナチス魂は雪も氷も何のその、ドイツ陸軍は一月下旬から二月にかけて厳冬のアルプス連山に勇壯な雪中演習を行つた。

南方國境に近い某基地を出發した部隊は實戰同樣の隊形を整へて勇躍進撃をつづけること數日、愈々目的の演習地アルプスに達するや、華々しい攻防演習が展開された。

見渡せばたゞ白皚々の峻峯また峻峯である。その峯から谷へ、谷から峯へ、スキー部隊は白雲を霧のやうに蹴つてつき進む。砲兵隊は砲車を馬の背に默々と峻嶮を攀ぢる、と、やがて頂きの一角から殷々と砲口が天に吼える。敵空軍の襲撃を邀へて雪をかぶつた樹だちの下からは高射機關銃が鋭い火花をはきつゞける。

雪を進み、雪に寢、實戰宛らの演習旬日、アルプス連山は近代兵器とナチス魂の烈々たる鬪志に掩はれて明け暮れた。

1 峯から峯へ、一氣にスキーを驅つて電話を架設する電信隊。

2 負傷兵は急造の橇に載せて運ぶ。

3 砲車を分解して馬の背に積み、雪又雪の坂を攀ぢる。

4 敵機襲來！ 雪の樹蔭から猛然と高射機銃が火をはく。

5 轟然と一發！ 砲聲は峯にひゞき、谷にこだまし、樹立の雪をはふりおとす。

寫眞協會

史資料センター
Asian Historical Records
www.jacar.go.jp

疲勞恢復に

オリザニン

ビタミンBの始祖

疲勞の原因は糖分の分解に依つて生じた乳酸が體內に蓄積するからであると言はれて居ります**ビタミン**B_1は乳酸の生成を防止すると共に過剩の乳酸を分解して疲勞の防止、恢復に顯著な奏效を見ることは實驗諸家の實證するところであります

從つてビタミンB劑の學界に於ける標準品たる**オリザニン**は疲勞倦怠感、衰弱感時には勿論各種のスポーツ等への應用が推奬されて居ります

（說明書進呈）　粉末、錠劑、液、エキス、注射液

三共 SANKYO

ORYZANIN

東京市日本橋區室町
三共株式會社

昭和十四年版發賣!!

發行所　社團法人　同盟通信社
東京・銀座
振替口座東京八五〇〇〇番

見よ!!　時事年鑑の威容

昭和十四年版
理想的な年鑑・經濟的な年鑑

◎まだ御利用のない方は是非一度御覽下さい!!

實際智識の源泉

萬戸必備の百科全書

一册に凡てを盡す綜合大年鑑

唯一の四六倍判堂々八四〇頁

『**時事年鑑**』は凡ゆる年鑑と百科辭典を一册に壓縮した我國唯一の**綜合大年鑑**であります。の內容は今更申すまでもなく飽く迄も『**時事年鑑**』二十年の傳統を生かすと共に本社獨特の組織と完備せる通信網によつて資料の豐富、統計數字の正確を誇り得る最新のものと確信致します『**昭和十四年版時事年鑑**』は政治、外交、軍事、財政、經濟、交通、勞働に、更に文藝、美術、スポーツ等に、事變下日本の凡ゆる實相と國際非常時局の情勢を克明に記錄しつくしたもので、總ての年鑑中の王座『**標準版**』の自信を以つて世に贈るものであります。敢へて銀行、會社、工場學校は勿論御家庭にも是非一部を御備へになる樣お奬めする次第であります。

定價　**金二圓五拾錢**

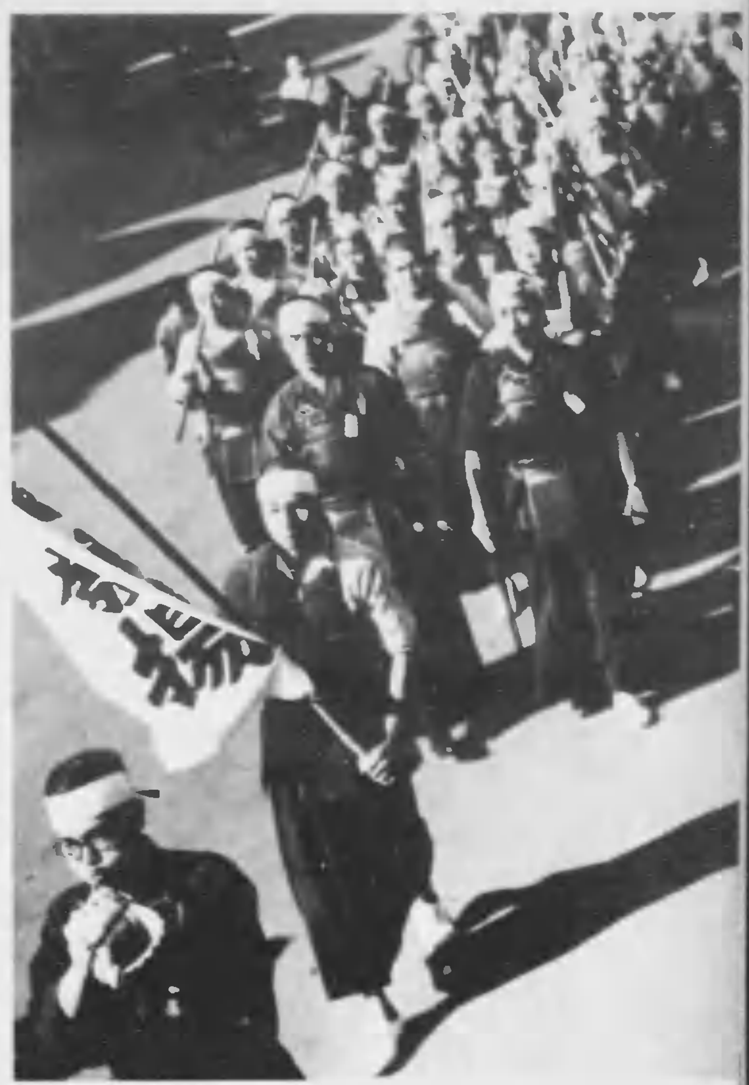
送料　地方・三十三錢
　　　海外・六十二錢

＝本日即時御申込下さい＝

（本社支社局又は振替口座東京八五〇〇〇を御利用下さい）

讀者のカメラ

應募作品

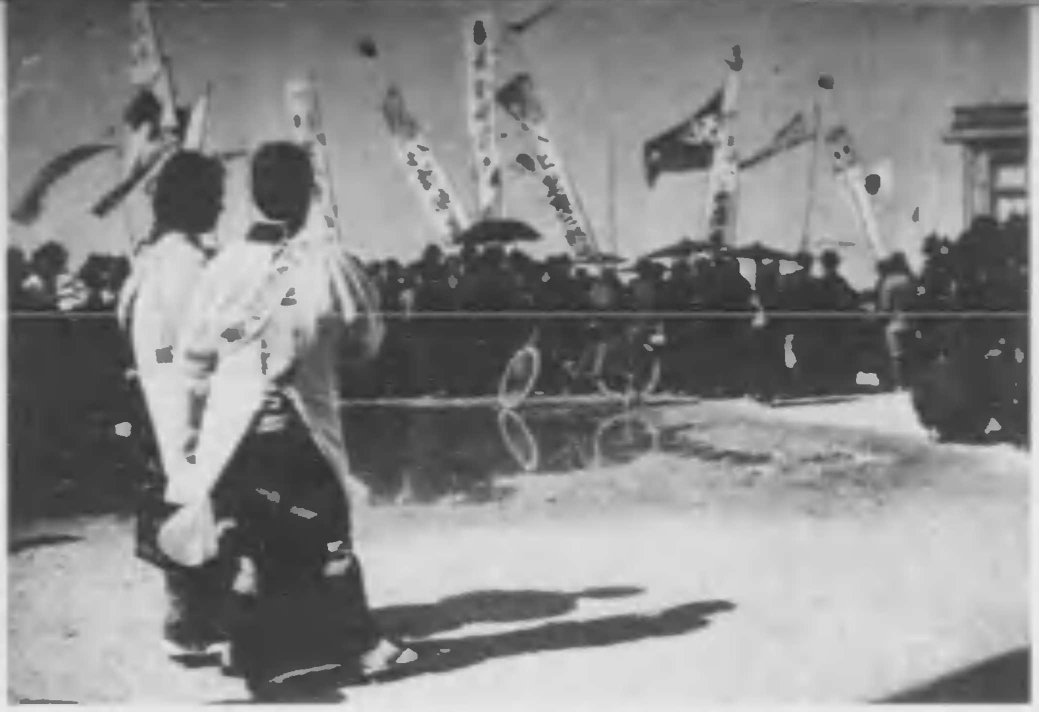


少年劍士は進む

東京市豐島區　上富　直一

國民精神發揚の長旗を掲げ粛々進む少年劍士、市內四十八小學校から選ばれた小劍士六百名は靖國神社參拜後堂々市內を行進した。

⇩

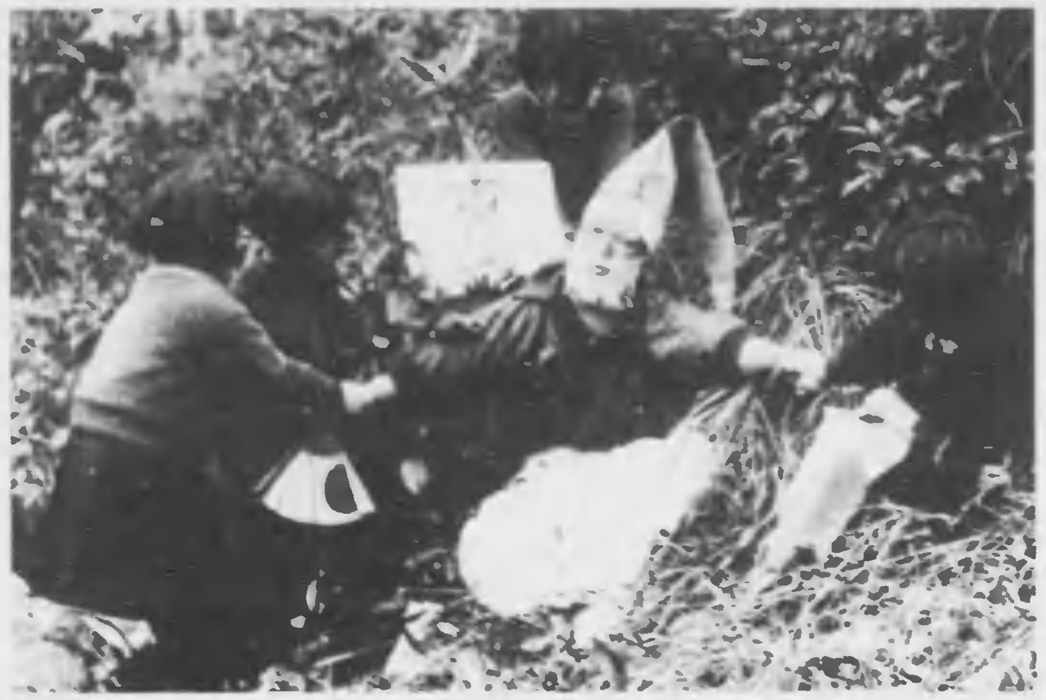


沖繩入營風景

那覇市久米町　池宮城　秀三

歡呼の聲に送られて今ぞいで立つ帝國の南端沖繩島の入營出發だ。船はいよ／＼纜を解く。我が父よ、兄よ、子よ、祖國に盡せ。

⇦

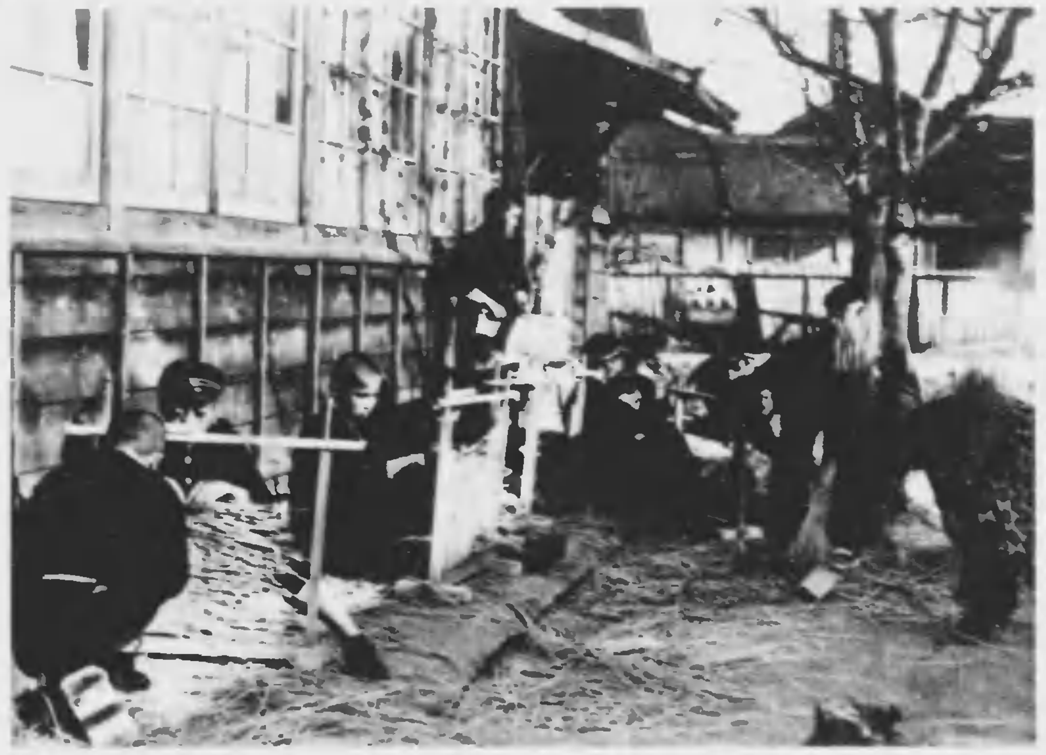


居たぞ上野介

大分市上野町　大塚　一仁

大分市金池小學校の義士會は男女二組に別れ、各兒童が義士となつて先生が扮した吉良上野介を探す。全兒童血眼となつて探すこと四十分、遂に合圖の呼子が高らかになる。意外神社裏の草叢にかくれてゐた上野介、しかも女兒軍によつて發見され、鼻高々の女兒の面々。

⇙



汗の結晶は慰問袋

福岡縣三瀦郡　城島小學校

酒の町城島小學校高二の男兒は放課後の一刻を先生考案の機械で酒米の古俵を貰つて來てせつせと瓶菰を造つてゐる。かうして働いて得たお金は皇軍將士の慰問袋となるのである。

⇦

讀者のカメラ　應募規定

一、題材　國民精神總動員をテーマとした報道寫眞、一枚にても組寫眞にても可
二、印畫の大きさ　なるべくキャビネ判程度が好ましく、裏面に寫眞說明及び住所姓名明記のこと
三、締切　每週火曜日
四、賞品　內閣情報部賞牌又は金五圓以上の賞金を呈す
五、應募作品は一切返戻せず、また採用寫眞印畫の版權は當部に歸屬す

寫眞週報（禁轉載）

昭和十四年二月二十二日印刷發行

編輯者　內閣情報部　東京市麴町區永田町　內閣總理大臣官舍內
印刷者
發行者　內閣印刷局　東京市麴町區大手町

定價	
一部	十錢
半ケ年（前金）	二圓四十錢
一ケ年（前金）	四圓八十錢

―送料不要―（外國郵便に依る地域は一ケ年九圓十二錢）

半ケ年分未滿配送御希望の方は一部十錢の割合を以て前金を添へ御申込み下さい

申込所
內閣印刷局發行課　電話丸ノ內(23)三五一一―九　振替東京一九〇〇〇
全國各地官報販賣所
東都書籍株式會社
各書店・驛賣店
各新聞販賣店
寫眞材料店

★表紙――

荒漠たる三河の麥畑にトラクターを運轉するザバイカル・コザックの青年。滿洲國の誕生とゝもに平和たちかへつてから七年、天惠の沃野に今や彼等はトラクター使用の大規模經營をはじめたのである。樂土三河、農土滿洲國の建設に[illegible]は鳴る。

撮影　南滿洲鐵道株式會社

寫眞週報　昭和十三年二月十二日　第三種郵便物認可　昭和十四年二月廿二日發行（毎週一回水曜日發行）第五十三號

胃腸の弱い人は…

痩せがちで顔色が惡い、貧血する、仕事に興味が湧かない

……その多くは榮養上の缺陷――特にヴィタミンB複合體の不足から胃腸の機能が低下し食慾、消化、便通に異常を來すためです。一時的に胃腸の働きを刺戟する消化劑や制酸劑よりも、不足した榮養素を補給して機能そのものを更生し常態に還すエビオス療法がより効果的なわけです。

三〇〇錠…一圓六十錢

エビオス錠

内閣印刷局印刷發行

（本書の大さは規定A4判・「週報」倍判）